

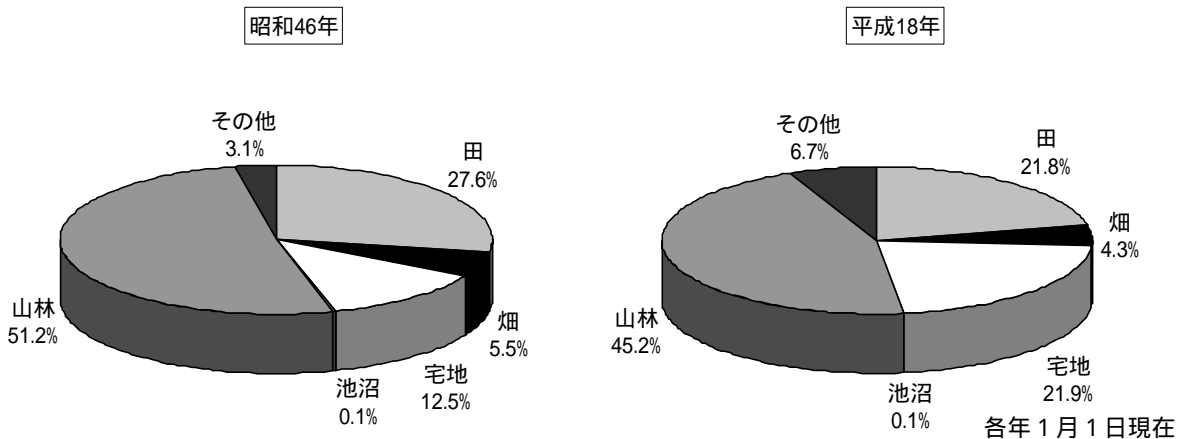
(4) 土地利用

琵琶湖流域や木津川流域など上流域では比較的耕地が多く、下流域では住宅地や商・工業用地が多い。

琵琶湖・淀川流域の平地部では古くから都市が形成されていたが、特に高度経済成長期以降は京阪神地域とその周辺を中心に人口・産業の集積が進み、さらに都市化が進展した。この結果、大都市周辺部では農地から宅地への転用が進んでいる。

琵琶湖・淀川流域における平成18年の土地利用面積を見ると、山林が約45%、田畑が約26%、宅地が約22%、その他が約7%となっている。昭和46年と比較すると山林が6ポイント、田畑が7ポイント減少したのに対し、宅地が約9ポイント増加した。

猪名川は、典型的な都市河川であり、その流域は、阪神地区のベッドタウンとして大規模な宅地開発が行われてきている。



- 1) 集計の対象とする地域は、琵琶湖・淀川流域に一部または全部が含まれる市町村である。
- 2) 課税対象分の土地のみを対象としている。
- 3) その他には原野、牧場、雑種地も含まれる。

【図1-4 利用形態別の土地利用面積】

三重県「平成20年刊三重県統計書」
 滋賀県「平成18年度滋賀県統計書F.Y.2006」
 京都府「平成18年京都府統計書」
 大阪府「平成19年度大阪府統計年鑑」
 兵庫県「平成17年兵庫県統計書」
 奈良県統計協会「平成18年度奈良県統計年鑑」より作成
 詳細は資料1-1を参照

(5) 気象

降水量

日本列島は、海洋性の暖気団と大陸性の寒気団が交錯するところに位置するため、気象の変化が激しく、降水量は極めて多い。

琵琶湖流域では、北部の山地は冬季の季節風による降雪の影響で、2,000~3,000mmと流域のうちでは最も多い。主な積雪地帯は、湖西の北小松と湖東の彦根を結ぶ線以北で、最大積雪は1月下旬から2月上旬にかけて観察される。

木津川上流の高見山地から琵琶湖流域東部の鈴鹿山脈にかけては、太平洋型気候の影響を受け、特に夏季は台風の影響により雨量が多く、年間雨量は最大では2,000mm以上にもなる。

琵琶湖南端から京都盆地・大阪平野に至る琵琶湖・淀川流域中央部の低地での年間降水量は1,400mm前後もしくはそれ以下と少ない。